

書評 林幸司著『近代中国と銀行の誕生 金融恐慌、日中戦争、そして社会主義へ』

著者	久末 亮一
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジア経済
巻	50
号	10
ページ	49-52
発行年	2009-10
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00007140

林幸司著

『近代中国と銀行の誕生——
金融恐慌、日中戦争、そして社会主義へ——』

御茶の水書房 2009年 viii+243ページ

ひさ すえ りょう いち
久末亮一

I

近代中国経済史研究のなかで、特定個別の銀行史研究は、従来、進展していたとはいいがたい。たとえば中国銀行などの大手銀行、上海商業儲蓄銀行などの上海系銀行、中外合弁銀行などの研究は一定の蓄積があり [Pugach 1997]、また少し視角はこととなるが、華僑資本が香港で創業した銀行については評者の研究などがある [久末 2008]。しかし中国内陸部の銀行を、地方経済のありかたとともに綿密に扱った研究は、ほとんどなかったのではなかろうか。その点でひとつの風穴を開けた本書は、四川を基盤とした「聚興誠銀行」の、1915年の創業から53年の消滅までを、地域史の立場から丹念に描き出したものである。

四川は気候風土から豊富な諸物産にめぐまれ、古くから「天府之国」といわれた。そしてその経済は、揚子江とその支流である嘉陵江が交差する重慶を通じて、揚子江流域、さらには沿岸部とむすばれた。本書は、こうした四川の地で、民国期、日中戦争時とその戦後、社会主義化、という大きな社会的枠組み変容を経験した時代において、聚興誠銀行にかかわった人々が、どのように主体的に行動し、それを突き動かしたものが何であったのかを、銀行の興亡史から明らかにしようとしている。

著者によれば、そのような問題意識の下、本書は次の視点から考察をおこなっている。

まず、近現代中国における銀行制度の展開過程と、

その帰結としての銀行組織の変化である。著者によれば、「近代中国における銀行の発展過程は、西洋の近代的制度と、中国の伝統的商慣習・制度が、当時の中国を取り巻く政治的・経済的変動に規定されながら、融合していく過程」で、「同時に、1949年革命以降の中国における銀行のありかたは、これらの制度が再び社会主義銀行制度へと転換していく過程」であった。そして「銀行制度が、中国においてどのように展開していったのかという問題を、制度面から明らかにしていくこと」が、第1番目の視点となっている。

次に、中国内陸部における商業秩序の変化からみた、銀行の変遷である。著者は、中国の社会経済的変容は、伝統から国家統制へとという二項対立的構図で理解されてきたが、現実には「両者が融合し相克する中で進行していった」と考え、「こうした問題について考える際には、個別具体例に沿った事例研究をもとに、旧来の慣行に基づく商業秩序と、新たな秩序への転換双方を検討してゆく必要」があると説く。そして「銀行の変遷過程をこのような商業秩序の変動との関連から照射し、変化及び非変化のありかたを検討していくこと」が、第2番目の視点となっている。

最後は、同族企業家のありかたである。銀行の組織の変遷という企業の「外的構造」とあわせて、銀行営業の実態や、国家や権力者との人的つながりといった「内的構造」に着目し、それを担った同族企業一家の姿、その「企業家精神」を問いながら、近現代中国人のありかたの特質を探っていく試みが、第3番目の視点となっている。

II

まず本書の構成であるが、以下のように成立している。

序 論 本書の課題とその意義

第1部 銀行の誕生とその発展過程(1915~1949)

第1章 重慶における銀行の設立とその時代

第2章 1920~30年代の聚興誠銀行と重慶銀行業

第3章	金融恐慌・日中戦争と聚興誠銀行の近代化
第4章	日中戦争後の聚興誠銀行
第2部	共産党政権の成立と銀行業(1949～1952)
第5章	中国共産党による重慶「接管」工作の展開
第6章	工商行政機関の設立——重慶市工商業聯合会籌備委員会——
第3部	銀行と社会主義(1949～1953)
第7章	重慶「解放」と聚興誠銀行
第8章	公私合営へ
終章	

それでは以下、本書各章の概要をみてみよう。

第1部では、中国内陸部の四川で株式銀行制度が展開されていく過程と、その変化を促した要因分析が主要課題となっている。

第1章では、聚興誠銀行の設立経緯と特徴について考察している。創業者の楊家は、19世紀前半に江西省から移民した家系で、19世紀後半の四川の政情不安期に楊文光が内陸部の物産交易や投機で財を成した。そして同地では、楊家は外来・後発の新興勢力であったことが、逆説的に在来の金融秩序にとらわれず、「銀行」を創設する要因のひとつとなる。

第2章では、設立当初から1930年代までの経営を考察している。聚興誠銀行は楊家が株式の約7割強を掌握し、重慶を中心として四川や揚子江流域に展開した。業務では預金・貸付よりも、為替取引が収益源となるが、1924年に楊榮三が総経理となり転機を迎える。彼は赤字の貿易部を閉鎖し、沿岸地域の有価証券投資などに傾斜するが、これは財務基盤の悪化につながる。同時期、重慶では銀行設立が相次ぎ、銀行公会も設立される。そのなかで同行は、1920年代には優位を保つが、30年代には追い上げられ、後塵を拝しはじめた。

第3章では、1930年代の金融状況や日中戦争のなか、銀行が法人改組に至った要因と、その成果の頓挫を考察している。1930年代、収益源であった為替取引は、四川の金融恐慌や幣制改革から縮小したため、商業金融から産業金融への展開を試みた。また

1937年には、組織近代化を図るべく、有限責任株式会社に転換したが、依然として楊家が経営を掌握していた。そして日中戦争期、広域での銀行業務は不可能となり、再び四川を基盤とした物産取引や、上海方面から遷移する工場や政府機関との金融取引などに集中する。

第4章では、日中戦争後の聚興誠銀行を、政府の政策と銀行の内情という二方面から考察している。戦後初期、銀行内では楊季謙の国際化・産業金融化路線と、経営トップの楊榮三の地域的商業銀行路線が対立し、戦時の裏帳簿問題を契機に、前者が経営を掌握した。しかし国際化・産業金融化は、内戦激化とインフレによる混乱から頓挫する。一方で楊榮三は、共産党に近い高興亜が主任をつとめる銀行の経済研究室を根城に、人事抗争、はては政権交代後の銀行存続を見据え、混乱のなかの現実的選択として、共産党に接近する。

つづく第2部では、共産党政権が成立した1950年代前後に、重慶で聚興誠銀行を取り巻いた政治的環境の成立過程を中心に扱っている。

第5章では、重慶で実施された公営銀行の接收過程を考察している。まず、都市接收制度の整備、重慶での接收の陣容・対象、各方面での接收の実態が記されてから、省・市銀行の接收と再編過程を論じている。こうした接收から、次第に組織や人員が選別・改造され、共産党政権の基盤を築くと同時に、その後の民間銀行の接收にも影響を与えた。

第6章では、工商行政機関の設立過程と機能を考察している。そこでは共産党による商業再編のなか、政府と民間の仲介者であった同業公会も再編され、新制度に取りこまれていった過程が明らかとなる。それは企業・地域の利益を代表して自律的に活動してきた同業者組織が、政府による他律的企業統制組織として変容し、民間企業を社会主義化する際の基礎的条件にもなっていった。

そして最後の第3部では、聚興誠銀行の自主的再編から、1953年に公私合営に統合されるまでの過程が論じられている。

第7章では、重慶「解放」前後の聚興誠銀行の様相を考察している。1950年、革命後の聚興誠銀行で

は、重慶での存続を目指す楊榮三が主導権を握る。こうしたなか、同年に開催された「座談会」の内容からは、銀行の経営者たちが社会主義化の即時実行はないとの認識から、地域的営業によって国家銀行である人民銀行への対抗を試みるなど、あくまでも自主経営存続に向けた活動姿勢を貫いていることがわかる。

第8章では、聚興誠銀行が公私合営化し、その幕を閉じる過程を考察している。そこでは朝鮮戦争勃発による国際環境の急変、五反運動による大規模運動から中国が急速に社会主義化を強め、次第に銀行経営が他律的要因に規定される様相が明らかとなる。そして銀行側では、聯営に参加して直接経営権を放棄し、引き換えに株主資産の安泰を図る方向が容認されていった。こうして1951年、聚興誠銀行は「公私合営銀行聯合総管理处」に加入して自主的経営を放棄し、53年には他の公私合営銀行と合併され、歴史に幕を閉じた。

III

本書は、舞台としての近代四川の地域経済や地域政治のありかたを丹念に考察しながら、聚興誠銀行の揺れ動く姿を、見事に描き出している。聚興誠銀行の軌跡とは、著者が記すように、近代中国の社会経済的変容が、伝統から国家統制へという二項対立的構図ではなく、現実には両者が融合し相克するなかで進行していったことの、ひとつの象徴であった。

聚興誠銀行は、楊希仲が日本留学中に見聞した三井財閥をモデルとした「新式銀行」であった。しかし内実は、純粹に西欧型「銀行」のビジネスモデルを踏襲せず、華商社会の実態や思考を色濃く反映していた。たとえば設立時の資本構成は、合股の思考にも共通する優先配当権と経営権を持つ無限責任株と、有限責任株の2種類が並存する「股份両合公司」であった。また融資では、錢莊のように対人信用重視の無担保貸しを、後年まで多用していた。すなわち、表は「銀行」という器であるが、中身は華商社会の実態や思考を濃厚に引き継ぎ、その2つの性質の融合と相克のなかで、聚興誠銀行は活動してきた。

こうした聚興誠銀行の揺れ動く姿は、内包された要因ばかりでなく、外的環境の変容に直面した際にも反映される。たとえば、地域的商業銀行である聚興誠銀行が、環境変容に応じて展開しようとした経営戦略も、つねに揺り戻しをともなった。1920年代の沿岸部での有価証券投資の積極化、30年代の産業金融化へのシフト、40年代後半の国際化・産業金融化などは、一方の経営ベクトルである「四川の地域的商業銀行」としてのありかたとの融合と相克、いいかえれば近代中国における広域と地域の関係が変容するなかでの融合と相克でもあった。そして、それは「解放」後の外的環境変化のなか、自主経営を模索するも、ついには社会主義化という現実とも融合と相克を経験するなかで、公私合営に移行して幕を閉じていった姿につながってゆく。

このように興味深い論考を重ね、近現代中国のひとつの形を明らかにしたのが本書である。一方では、いくつかの課題をより深く解明することで、さらに論考が際立ったのではないと思われる点もある。

第1には、重慶の伝統的金融業者たちが、聚興誠銀行の誕生と活動をどのように受け止め、また両者の間ではどのような関係が生まれたかという点である。重慶には銀号、票号、錢莊などがあり、清朝崩壊で票号が没落すると、在地商人と結びついた錢莊が拡大したという。この状況は広州と酷似しているが、広州では銀号が為替・通貨取引を掌握して一大勢力を築き、外国・内国の銀行はその領域を侵食できなかった[久末 2007]。上海の南市・北市の錢莊は、銀行の影響は強く受けたが[根岸 1951]、1930年代も力量を保っていた。このように近代中国では、伝統的金融業者と外国・内国の銀行の間で、競合や協業などの関係が展開されたが、この点で重慶ではどのような展開がみられたのであろうか。

第2には、重慶の物産と為替の取引所であった重慶交易所についての考察である。広州や香港でも、このような金融取引所が成立していたが、それらは往々にして華人金融業者のギルドと表裏一体でもあった。こうした取引所内部の考察によって、その取引機能だけではなく、たとえば上記で言及したような銀行と伝統的金融業者の勢力関係や交錯など、多

面的な側面が見出せた可能性があったのではなかろうか。

第3には、聚興誠銀行にとって、上海支店と上海市場の意味がどのようなものであったかという点である。上海は、四川など内地からの物産交易決済の一方の基軸であり、また1920年代は楊榮三の有価証券投資、40年代は楊季謙の国際化・産業金融化による移転計画などで、少なからぬ意味を持った。本書では、従来明かでなかった四川—上海為替(申匯)の構造が、物産取引による決済関係を例に解説されている。しかし一歩進めて、聚興誠銀行の上海における支店と市場の意味を明らかにすることで、四川の経済的な構造や位置を、より大きな視座から解明する一助となったのではなかろうか。

第4には、本書の「人々を『主体的』行動へとつき動かしたものが一体何であったのか、ということ」を明らかにする」という目標は達成されたのか、という疑問である。著者の指摘のように、経営者である楊家の人々は、各局面で主体的に現実的選択をおこなってきた。しかし、これは経営者としては当然で、意外性はない。むしろその根底で、楊家の人々を突き動かした本質が何であったのかは、実は明確にされていない。それは「銀行」という組織への執着、またはそれと分離あるいは一体化した「家業」や「家名」への執着、それとも個々人の「名誉」や「企業家的野心」や「家族間感情」への執着なのか。その時代を生きた楊家の人々の思考の根源を明らかにしてこそ、彼らを「つき動かしたもの」がみえると思われるが、最終的に一歩踏み込んだ説明はされていないようにも感じた。

もっともこれらについては、資料制約などから解明の難しさがあったかとも拝察する。それは同時期

の金融史・経済史を研究する評者も、しばしば直面する問題だからである。

最後に、本書は3部構成となっているが、扱っている時間軸と内容を考慮すれば、第2部と第3部をあわせて2部構成とするほうが、落ち着きがよかったのではないかと考える。第2部と第3部が分離している必要性は、評者にはあまり理解できなかった。

以上、読後評価を率直に並べてきたが、結論を言えば冒頭にも記したとおり、本書は中国の地方銀行を、地方経済のありかたとともに綿密に考察した好著である。近代中国史の研究者だけでなく、他地域の経済史や金融史の研究者にも、ぜひ一読をおすすめしたい。

文献リスト

<日本語文献>

根岸 佑 1951.『上海のギルド』日本評論社.

久末 亮一 2007.「香港ドル決済圏における銀号の役割——広州—香港間の輸出取引の決済を例に——」『アジア経済』48(3): 29-46.

—— 2008.「廣東銀行の興亡——近代華人資本の銀行業展開とその限界——」『アジア経済』49(3): 2-29.

<英語文献>

Pugach, Noel H. 1997. *Same Bed, Different Dreams: A History of the Chinese American Bank of Commerce, 1919-1937*. Hong Kong: The University of Hong Kong.

(政策研究大学院大学研究助手)